古今物語集 全

特別
へ10
7371

ISSEIDO
東京 成文堂 神田
貴
ヘ10
7371

霞亭文庫

序

いつのとしのあるなむしたぐ日のたづきころ
とはあぢはふ元名屋諸仲光と乃主人
ひとりの案をとりて事あくをよ庵主者人
とへてをとりあつまりうられバそもむ
より物をられたる事ぞ多くとりなさて
かくもとりのうそのまもあれ云つる

まいくたの月日ぞ過て高ちかせ
三方燒されたる芦屋のきさしつそ和の
庵よりもたるまつも言れつるもしとそみる
かいまつるして彼を人まつをれバを人みて
いとく芝浦がはられるまつぞや秋の月を張
是とかりの志るしに

仙女忘れ草の伝

爰に仙女あり。名を忘れ草といふ。ゝ八百とせをへてせたらで。そのなをあけることと雪女乃ごとし。新東の川のべに住居て世をひろく物忘るゝを教へるゝ。是をなをひ得むとて。くゝ人雑り。物是をうらひゆく人。礼物を懐に して。来るといへども。是に入ることおさぞ。

仙女又云ふを忘れく終に受ぞ。さる八仙女誓ていはく。

我今伝ふる物忘れ乃草ハ。恋慕先生のつゝみ。又それよみづからが立支を。ふゝて教ゆ。今日八先恋慕乃先生乃教をもてをるり。又是をなゝ八むとゝうゝ八弟に

教ひまるゝとゝひて。ひとつ乃草物を取りてくゝよみくゝ曰。

忘れ草くゝ。そもくゝ公ハ物のうちにあるとハ知りゑど。

後にそのかたちを忘れ。ゝ足にふけバ彼を忘れ。うれにつけバ忘れを忘れ。ゝ生れてハ母の抱乳ー時を忘れ。生長てハ児乳ー時を忘れ。老てハ子ー時を忘れ。死なのバいけ乃母乃我身ー をも忘れむ。忘れバ公ハ人とゝ物と知ばを。扨今世をのゝみ乃ゝ人とゝ物をつゝまゝに。

つゝみくゝ人と懐さゝんとおもくゝハ。黄泉平坂にまた

これの形乃まきはをのひくぐたちまち如これ
がごとく人となるべしぬハしに呂これをくくと数くゝかそこ
よみ終り。それ和文のむねハかくのごとし。如如これんと
ねがはんよハ。月を大きくく寫さくしかく
ートたまくこれ数乃ひとつなり。如頂をとりて分一とし日
をりつく分二とし。寫をとりて分三とし。その次ハ乳房
より腰に及び。左右の耳肩を採よりて。ちとちと
九三十ホこれをの一ちくくこちくこハ。まづ頂を云れんと
云るよハ。公を掛よ掛く月を云れんと云るよハ。公ゴ掛を
掛。元はをみ陰ひ右を云くみハ左を掛りハたを云く

ゴハ大をゼ。ゴ公をちく。智ひるがないちうて。閉く牙を云れ
終よ秋まく。云くにいちくこ。それ今日ハこれまのぐくまくす
ゆうく。如あそこいひくこ。おくよ。その人ちや業を云れ
物事を云れ。病人を口をれ。ちるぞ長次をなちハんと
掛りして。おちきこ。仙女ゴ母ゴりこよいれバ。仙女又ゴ食を
云れく出くく教くく曰。いくくちく紙云れまや。子ちさ
くく曰。寄来くくまづ如三十ぢちハたかよ云れなちう
とちふ。仙女曰ちくく今日をくく伝るがひとちゆるし
ちくとちひくく手をひそめ。擬ちちけたるよ新をお
ゴ進ひ出ーー。戸をきくかちあくいちくぞ表の門を云ち。

ゆゑ玄象を云る。たぎよ竈を云る。柳を云る戸を云
る。雪稿を云る。樹を云る。此数をかりなり。而みいろう
千にのよ。神女乃紫宮巻をたゝして。他の赤く或そ
こはさゝまのぞし。ひるとゝわふりの代云れ云てゆよは
迄云れのそをとハあるゝ。そのく眞儀とをる云ゝのも
べるがその術ゝてゝ行ひとらひとをゝめ。相ゝ人
をゆかゝくおりして。日をそゝ身を移くゆき意ひに
ゝるゝひうれど。ゆよかりれゝるゝ文をあゝぞ。仙女ゞ相ゝを
ゝも遠ゞぶれバ。或時人居ゝくゞる写をとゝう。生れる真実
を数へゝとゝいバ。仙女声をひそめくゝあゝく曰。ゞゝみかりれる

ゝもあゝバ。ゝれ見の肉を登州ゝ焼く。或ゝ乃云れ
ゝを汲ゝ世ゝく。ゝゝ考ゝく食ひたゝ。ゝゝバ大云れのゝを
となりのゝむとなり。言葉。相ゝそのゝひゝるひとぐ
世ゝゝふゝ教ゝりとおりひゝかバ。彼神文ゝたゞひがつく
その居を世ゝ蔵ゝさゝゝに。仙女ゝちゝたちく。
我居をゞゝ世ゝみゝゞゞいたゝぐゝ。ゝを義ゝゝと
倒ゝく。ゝゝ相云れ乃術をかくゝるとゞ。

古今拾遺乃記

○日本武尊夫を平げんとて。東の国よりぐうの舟。伊勢乃
国小津の湊よりして。柳倉きこめしたく。佩せる所太刀
をひろ松の樹よりけく。終よ忘れ給ひくぐりすぬ。
詳曰これ勇なり

○泊瀬倉の天皇八。雄略二年梅川の名よ物語の来通せ
を激怒したまひ。雄略天皇八人まんぞとのくまひ。
ちぎりなせく。忘れ給ひ八十年あり。詳曰所あり物
語

○あるは所京の話を見巡りて長出く。河原左大臣の話

物を数へ。ぞるむかし物語りをもしぞ。西くの名家をもかたりく。
拾遺集に秋乃野の草花がくりよりあらくとぞいひける。

○紀憲といふものくりくりくれ或人を知ばえんとて。ぞよ八
るたかくよ病のとぐりしを言ふくく。胸を
ねくく紙を投急ぐりしかバ。終よ火つきく燃入りぬ。哀傷乃
雅楽のあつくあるる。弱るきさつぎく。清ちなんと言ふるる。彼
準若してあぼえつるりを八言れまるる。

○むかし女ありるる。こを孫くく男のりくく。ぞるるとげんと
ひつりくれバ男。
今ぞに言れぬ人八世もはらーど牧のごさよぐ年ぞ孫めれバ

とりひろく男なりあひとるるれよろ

○他の妃宮とおぼく愛たる人。健忘といふ病よあるうく。

ムラ〳〵忘れ。それをみく知らせたる人。閑くみくかつ

公を忘れまろう。浮日これハ忘れろづひしるをゆるしたく

あるべん。

○大政入道清盛ハ。わたろしきりと忘れ久ろう。

○ひる妊女乃ちあ忘れまるがありしかバ。べられその女ろを

の眞こそ。ひるめとゆるしがたく。秋ろうえんとぞ往通ひる。

○今ハ昔。筍原の妊女。宿の忘れよろう。人ろみよりとわきま

まぐへひけるありしを。眞ろ乃ちのぐりる人。妊女を源

あ色ひしが別ろく時よ物つろハしく。又おひえんまぐるどいひけ

ば。彼妊女られをみくぞありひあなんといふよ儀よ所よく

うたふりのく居く。芝を居ろ。ばるが。編よ忘くべてかく形ん。

ありひあんとハ忘ろからよ。ひ前ろべと忘れなよ。とうたひて

あくける。浮日ふ氏妊女忘れ弟ぶ侍を拾ろる。

○秋の見日にあろうて奥沈恰ふ。忘れくくふが羅漢紀ろ。学ええ

く食ふが羅ひろきかと。一休和尚ひ問ひられバ。一休答へて。何とやら

いふとあろしが忘れうとぞ。

○冬ハ妻を忘れ。春ハ冬を忘れ。

○浮くハ師を忘れ食ろハ醫を忘る。浮日ハ浮ほよそかくのごと。

○攝戸乃国まハそも物忘れせし人多かりき。

○おりふ敷ハあく討えれど門のおよ。門つきたる捨をわ忘れ
おさたるハ。をこ物おさらがーるまーといふ人あり。傳乃人曰
それハ物乃なりひあり。諺曰寒澄りよ捨を忘れ貴
や。

○ろろ紀男。妻よいひけられく。ぬるもあーで住ゐる。さ屋をふー
あ紀ぐさうみえれバ男あるくゆくとて。
ろろよハ物もいひ今しー決が忘るとなるバ物も忘れん
或説作評。七通八達

○橋聖体雄とふ完人あるよく能め毒をさるゆを学長りる。

ある函ちきこーあーて今教諾あり。能喰むとのさまふ。忘れる
ごとく調へよと作られバ。体旋芸人をりて。今教より白物乃
く仕られるが。俗よ年財の程あり。忘きうよ物忘れつるつる
よ。大切のたてまつり物るれバ能つるゆハ許したやくと
ヤくまかんでなる。諺曰よ

○或人笑蔵たきをとりるゆを忘れく。そのまく湯よ入りが。
物をあーるよ物ぐるゆるーかバ。大声を発ーく能いく
ちびと寒よあるうたう。諺物めせそでいいる。

○天若彦といふ作ハ。天照大神の所使おく。西国よ下りる
が。大汝貴乃四のきかひよ物それ。お照姫のもよまうひく。

絵よりうごとゝをこれよろ。

○黄帝帝水のかたうよ拾びく。玄珠を云る。西張うとるとえく
ゆらんとそかてかつよ。象罔といふ大忘れ人あり。率いきて
とうかつ。或人評曰智惠ハ是小物

○遺却珊瑚鞭白馬貉不行或評曰遺却かつく滑稽情

○白閑並木宮乃天皇。武烈天皇ハ悪なゆよとこいふるとよく云れ
させのひる。

○却忘れまる嫌彼祝の席詞よいきくハ悔ることを言られバ。
ひゝけとゝとろひうゝをのく云れゞとおりひ居るが。

却祝ひをみく人くまのかくんとをる時。什嫌秋おもまかりか
といひかゝふを儀の人ゑづきくいくそれゞ尾をはこれ
バゝとおりひくまかりつあくんとをのく云る。

○おおりひかさんとをる人ハかるゝゞ見ぬ事ゞてにをあく
りのゝ。評曰服をあさぐハ樽のうちをみるるゝ。ゝをあくハ
ゝるゝ紀を付くるゝ。

○女三乃君小侍従ゝきこえをのハいぎとよみゝかどよい
のひゝくバゝとも云ゝあくぐゝさゝをさみゝを云れよろう
と。評曰云れまゝよ柏木の情つをこゝろゝなまろ。

○

鞠也年尼佛乃使弟紙ゝ上ゞいゝゝ集ゝゝ時。おゝ

りのこをせざりしかば。舎利弗まづ機たりしに。仏香積国
より香積仮をとりよせてくゆらせ給へば。舎利弗たちまち
食念を忘れぬ。或人評曰。かかるこそ世の人の
○おもしろきたる人なれ。かかるこそ門の前をこそかよかるね
あゆむものの。
○或人山伏にあひて道を問れてくあらぬ所へ迷ひぬ。かしこかば。
日も暮るに大きなる石のうつ木のあるへ入てうづくまり居
たり。ものしあるよ人又称ごとく迷ひ来りぬ。彼そこにいで
乃伏れて夜よもすがらものをとふ。さらばとてくどりよひき
いまとく有りとてうたふ。ひとりさのごとくして来れり。なぞと

いへば道を忘れてくるよ来つといふ。さらばとて今ハ三
人まとりてく　ぞうをうたるよ。救いてくれけたりと物ぼめる
ところ。大きなる蛇ありのそこのうたひ。ものくそ。その三人ま
のあんとまる財。三人とりふ南無三宝とりおこれ此話のうちに。
地獄の評曰。生世いとひてく宝の家よ書かへたり。
○秋八月ぞうり。俄よ蚊出たりく。ものの面あれとよみ
しに。船ハ百艘あまり宿よ志づみ。人ハ千人あまり死せる
とき。唯一人上船の屋よおのぐつきたる舟ふなり。如何よ
きけば。ものごとく船乗しくいきかのふとぞ。評曰。
るが業なり

○みやこ室町にあるうまやに八十ばかりなる法人あり。
此法人母をかりて世をすごすその母よりあるいは
ものかりて物ぜにとなりつべしやとこひられば簡入家をとこ
貧しく日ぐらしをせし七十年ばかりはたりつべしとかりあるべ
て。海老がとうけあるべしやとこひる。法人我法を
忘れしるべし。
○奇怪なる天よりくるとかりあるべ。彼を捕へ久しく匂ひつるよ。
ねぐらをたづねつるかく。嗜んとまるみも笹まぶ。まるく言ふく
のぐるすハこれあるべ。
○筬紫よりぐるく住る人乃ぐ。

あるざかる鄙に六年住居てみやこのてぶり忘らるまじ
俗曰そもく初の風俗といふハ常ハうくむもひ俗くひもひ。
髮ハうくゆひひきくゆひ。物歌又もく組ーたとえみやこよ
住るとも。おびゆるひまハあらじと思ん。
○在逝の將ときこえるあるが。おちこぶの君乃りふいきそ。
たのひるふ。笹をのん言の人をとりよ人つかをーた
まバ。をさく言れクひるれバとく。おちこの君
をもあるばざるそうるべ。化笹何乃まゝ別ーみを言るとこバ
御立のもべりーをえをるふ。楠正儀が西行よ別れのさまを。

ふぜをあくはくくとみをれ
る滴ふ。人あ来れば。おうく使のむをゆりぬさて
ゆ名くく回れくおりひさりーまふ。楠多門義長と言く
る義げーかびおりいしーかば。今一度ゆうんと回ひ如
されくだとおりひーかどもこもさわがど。楠田門義と
いひるやーるふ。人いくく又その返りをのぐくかーる。
使を人乃りふかりてるゆ。お書を書ーく。
今日ゆり家乃名ぐくも。楠田門義と仕りたー
といひおーさけられば。を人あやーみるひく。何ゆと作お
される尉。今日なん四使のさねくぐさるゆをぐりーと

ゆとされば。を人公ある人みく。他ゆよ拾ふれ。ちるるゆば
をけられ。正成乃嫡よ。ぜうぐれーば。とみのりき。
れとけりて。頼朝も加藤拾ふをもくみりる。
○この果となれば。拾頼せたる人。頼る人乃りふたち
かりて。頼る人ハ城ゆ。たる人の海よいをひみく。或を
ゆげさけるひハ知り。或ハをびあるひハなりをふ。さるハ鎌倉
ゆるりく。日新いとみわやふさーのぐれば。拾ゆ風もの。
ゆりりく。ぺく先ハ忘れる新色ゆり。
○おをみる長ありぐとりの母死りるふ。従弟ぐもうち家
くがくくおりせよといひれば。ゆるせゆーどといふ。何れをと

とへバかくこそあそ今ハ仇なれとよみつれバ人よるげきを
頂ハせくいるよせんといひける。評曰人豈古姫乃かくこそ
みくゝ竟ちゆくハ云るひまりといそんや。

○或人云れがゝみといふるハいかゝ為る公よかゝとひるるゝ人を
ゝく曰。云れ紙ことといふとるゝと。評曰世の人公何ぞ云れ
紙かゝん。

○ある男。女よ和いひくゝをぞりに。今ハ我ハ為よ者ゝく藤
よ門もさをぞ仇をといひちぎりて。おその歩ハ云れゝく
藤入ゝり。女来ゝく門を和くゝよおきおぞりれバ。たゞぞか
られとおりひくゝそのまゝにかゝらんもらちをゝくゝく。

隣隣たる代。ひる男来かゝたるがゝみつけくそのかゝく
おくゝ行。ひよ妻となりくゝ伯居ゝり。彼云れるをとこ。
女ぞちゆりかバ。往往くゝ行ゝうゝるふ。そこの妻とゝり
居ゝかど男云れゝるバ。行ともいそゞ。女も又行ともいゞ。
その男往行ともいそゞ。評曰罪なり。

○者者代食ふ虫のうごめくが。終ゝ蝶とおりくゝ死めゞる。
いくぞかりたのゝかゝむとおりくゝど。彼又うごめる時をバ云れ
たるおるべし。

○かくゝ罪ハ行元の家のりとふ。蜂おりゝゝるれるひ
しに。沃より為事とおるゝ事をむくゝのふときゝくゝ公の

ゐれを情みてあげさのひーよ。天のむろ人おそ
くといさめて。天の羽衣をうちうせをれハ。命をいとゝ
しとおぼゆるなさへ。忘れおりるなり。忘れおりるあこ。蘇生する人
評曰。おろそかハ。ものよかるあこ。さろう人儀を居てさいふ
こと。忘れうて曰。好箇和道

○大宰大監大伴百代が可久

ぬなとの乃ちその歌れ物沈たれくおらで来ぎりとしおも
評曰。これあり物るもうん曰やゝ。

○仏の弟子八人乃中に未名といふ志人あり。これハ利益を
貪著して。りうくの財を傷むといへども。忘るゝ所を

ゝ。評曰。そこひめけかゞきなりけ。ひあるく多ハ。今ふ。ハ。
むこひも。ほの世も。忘れそこおりしろやとハ。ゞれ。

○商人桐文といふの。通称乃男。ものくいとく。芸国のも志事と
いふる沈まるゝ。色稚の曰いうもをう。桐文又ものいるゝむと
りく年沈忘ることいふる。色稚美ゝく。ゞ国ハ忠をりてきと
孝又これ沈く。男の師年乃かふ世のゝ沈常ゝいてみた
りふ。ものよ。せめくハ。ほ。ゝ。ものくをみを忘れんとるう。沈ある
ものの又そのゝことゝいバ桐文ゝ。秋国もむりハさるゝ。めら
ー。今ハ世の中乃せをりたるゝ。ゝ。
で。忘年今ハをるりとふ。評曰評なの。

十四三

○狐が女と化して来りしをそれとさとりぬまばわ食をもとめしさらば新なる物ばかりをくれるの歟又来よといひて後しりぞけ又来たらば今来るものにくれまいもさのごとくしてかへしたるに彼毎日来たりて相ひらかさくみるに婦を容のこと化して新ハ化こそその婦ハ本狐也化也それより婦ハ形くもらづ化して来たりたりる。評曰別てくハ志なりひまん。

○或人問て曰。酒を志憂の酒とハ何をもていうといふ。人答て曰。酒を呑バ憂を忘るる故也。又問て曰。酒の酒か。人答て曰。然り。或辯人評曰。ものとく又答ふるとハ答へ難ぞ

○あ阿人化物とハいふ物なるものなかりしに問ひられバ或人いく化物なりたるものをいふとあ答へ曰。問ふ人いふ物とさひて問ふ。さて物ひいかくみるふうちたれく。何とものらんあり。ろく教へのひしがくとひかへをふ。あり問ざりられバ又ゆきて化物のハ何とかをくものひしと問ひられバ化物とハ化物なりたるものをいふといひられバ。ひとまよ化物とるるて后むらとて。問ふくみくと云れよろう。評曰二人問ごら化物なり。

○類陵よ樣久といふ男あるり。是ハ庭ろ乃ものを化げえける

○若荷といふ物を多く食へバ。物忘れをするといふ。或議論乃

亭主義人よりとるゐん多くくを世ゐるよ。教ゐくゆくさこれバ。
よく秋ねとうち寿ひくいてゐるゐ。ほよおりくバ結掛ハこれ
ていよるるゐ。評曰代亭主も多くくひつくむよこそ。

○白紙嵐を掛ひ〜よ。よく別ゐくもぐりしが。多き嵐よ暴ゆ
ゐれくなハ。彼別〜人を忘れあゐ。

○雲近ぐ人とちぎりゐるよ。男ちぎりを忘れゐれバ。
ちらゐ勇士バちらびちゐひて〜人の倉れ惜くもあるる

評曰実際〜

○惟勇祝を市掛おゐ〜のひく。日吉乃山の藻ゆまりれ
そ〜ぬるよ。雲踏とけく業事の松片多ゐ。

忘れて義かとをおりふらひきくを多みとけく君をそんとハ
評曰。吉今集乃古歌よ。忘れてとなをそれバ。ゆハの間ゆかいゐ
ぐれゐ。

○物ちゐ人二人をよのねきく。物ゐく別ゐく陰意ちけるゐ。
ひとゐの男嵐のあひくたゐるよ。今ひとゐよ紙取たる之
とゐふゆの男かとゐを掛ゐて。此方も忘れゐとゐふよ。あるる
みゐよく代これをあ〜てゐ。ぬゐよる。ぬゐひ絵ゐて物ぐ。ゆく
いたるよ行ゐゐらバ。時ハ主財あゐるあれど。嫉妬のまゐけ
せぐゐ〜かバ。陽度よ嵐を除くおゐれバ。二人の男ゐちゆ後
主ゐく。ぬねきよバこそ。ぬゐハ来ゐてあれ。主ハあゐるよ

暑したる山蔭に寒うれといひのこりける。

○ある樵山よりゆきしに。鹿の射られたるがそこにあるを。あのいきてあるをたすけて。そのあくちとうがらしを。鹿とかへ。樵人とうかけく。人をまねくこゝろ。終に手をこれにかくるよ。終に手をこれにかくるよ。

あるよ。ゆうべ。その樵乃義よさうをえん。さめてかりひかれば。彼樵ゆきさうしに。山よりきてみるよ。他の人をうけく。そうさうとなれば。あゝ。彼樵さハ義うしかとりよ。

○ちぎり。こんきよ。義たうしに。世よ。ゆくハ。

かうぬぎうしに。向ハ。和のさたるげぬ。といふのハ。忘れをうき。今かくゆうてハ。又その公をたうとう。洋曰。みかぎうを

きんや。

○むう。世捨人あるうに。彼の附今ゆゑ。あんるゆ。れたそれ。

しゆうをうくあんやとそ。ぱくうひてのこ居。とで。むう。又人ありて曰。人何ぞ。ぱんや。此世乃むう。此の人うちこれよ。又我公のまくよゆうぞ。ぱと。ゆうぞ。此の業といふ。洋曰。ちゞめの世捨人ハ。和ばえるうるゆ。ぱの人ハ。忘れるうる。

○山よ。海うに居る。羅。たまく。世よ。あふとこれハ。此行ゆゆ。忘れ。

ぞよ。といふゆと。とうく。ちぎをみうるよ。人要がうける。

衆とき人のりとよ。ぞうに居て。ゆ。此よ。山。海うとて。ぱと。暑き

まろゆうりしかば。笠ゆん。忘れ。西つるとて。立海うしく。ぱ。臺

せ人はゝ行るゝも去るゝぞよきとこそ云れば。義とりわ
へぞ。とハ云ひどあつたよ笠ハ去をそれめや。とつぎなるよ お義ひ
てとそ有とく去りなる。扨なほ此りを反ぎらよ捨りられば。さハ
ゝ世ぞ其侍よハかゝしめる。なのみとて　さゝバ去れハあるよのう
てゝ。といひゝ云ぶゝ。と責られば。是ハ秋恋ゝとありひとびて
をりなるよ。ときたころ又義乃ゝ者ゝ有なる。扨さいり込
さゝぶ去れハ物のおりてかゝ。いひゝ所ぎゝ。こちをゝかりつる
とゝあよ。義なりゝ。ゝも世ぐ。ぱ。八十日あまり拾ひをりなに
なるぐゝうゝさゝ。ありひゝ。山の奥ハ雪のゝ。ゝ知れうせるゝとひ
なれバ義。

去るゝハこれぞよろゝ紀雪もあゝて
とゝひかゝりれハなるゝど
去るぞゝくゝれ去れぐゝて　とひて今ハ追ひかゝ
なり。詳曰今の信濃ハ去れ新之。
○信濃将去るを去るに俳とあるゝ猫をバ物の枝ゝ引ゝて
捨れバ。ゝまづ猫の枝ハ雪を去れぞゝて飛めぐり。去ぐゝ
ゝて空を去れゝくゝ去殺とあり。又去ぐゝなるよ去枝を去れ
て下枝とゝあり。さてなるあびぐよ枝を去れゝく堀みたり。
枝を去れゝゝ猫とかる。扨ぐゝ紀去人評曰。て去むゝ。

明和九年辰正月

帝華町五仏光寺上ル丁
吉野屋七兵衛

同訪
梅村　宗五郎　梓

堀川五条辻上ル丁
浅井　庄左門　行